

平成25年6月1日  
部員各位

明治大学雄弁部  
経営学部3年 高岡瞭

## 実存主義

『ドストエフスキーは、〈神が存在しないとすれば、一切は許されるだろう〉と書いた。まさに実存主義の出発点はどこにある。事実、神が存在しないのなら、一切が可能であり、人間は放置されていることになる。なぜなら、人間は、己の内にも、外にもしがみつべきものの可能性を見出だせないからである。人間は、とりわけ、弁解の口実をみつけられない。もし実際に、実存が本質に先立つとすれば、所与の、固定された人間本性に基づいて説明することは決してできないことになる。言い換えれば決定論は存在せず、人間は自由であり、自由そのものである。』

——サルトル『実存主義とは何か』

～Table of contents～

1. はじめに
2. 実存主義とは
3. アルトゥル・ショーペンハウアー
4. セーレン・オービエ・キルケゴール
5. フリードリヒ・ヴィルヘルム・ニーチェ
6. カール・ヤスパース
7. マルティン・ハイデガー
8. アルベール・カミュ
9. ジャン=ポール・シャルル・エマール・サルトル
10. 終わりに

## 1. はじめに

自由はすばらしい。このことは、大学生にとって特に感じることはないだろうか。しかし、何をしたいのか分からなくなる。ふと気がついてみると不毛なことに時間を費やし、残ったのは虚無感だけである。だが、不毛ではないこと、生産的なこと、意味のあることとは何であろうか。社会的によいとされていることをやれば、それは不毛ではないのか。必ずしもそうとはいえない。結局は自分がどう思うかである。自分を納得させるものでなければならない。無理に納得しても結局は前と同じ結論に至るだけである。そこで、人間の個人から世界や、他者、自分など様々なものを分析した実存主義について見ていく。以下では実存主義者であるか疑義を挟む者もいるが、人間の在り方について、存在から分析した哲学者や小説家の思考を紐解いていく。

## 2. 実存主義とは

人間の实存を哲学の中心におく思想的立場。合理主義・実証主義・ヘーゲルに対抗しておこり、20世紀、特に第二次大戦後に文学・芸術を含む思想運動として展開される。

背景には次のことがある。産業革命以降、技術革新や合理化などが起き、豊かで便利な生活ができるようになった。その反面、人間が社会の中で、社会を回すための歯車として、まるで機械のように行動し、人間的な部分が失われた。このような問題は個人の心の問題であり、各自が主体性を持つことによって人間的な部分を取り戻すことを目指したのが実存主義である。実存主義には様々な考え方があがるが、自分で問題を解決しようとする意識がある点では共通している。

## 3. アルトウル・ショーペンハウアー

(ドイツ：Arthur Schopenhauer、1788年—1860年)

### (1) 表象としての世界

『世界はわたしの表象である。 — これは、生きて認識をいとなむものすべてに関して当てはまるひとつの真理である』

——ショーペンハウアー『意志と表象としての世界』

表象<sup>1</sup>としての世界は主観であるが故に、世界の一側面にすぎず、他の側面があるこ

---

<sup>1</sup>目の前に現れている世界のこと。

とになる<sup>2</sup>。人間には知り得ない不可知の領域<sup>3</sup>が存在する。ショーペンハウアーはカントを批判し、物自体は知ることができないのではなく、「意志」であるとした。

## (2)意志としての世界

意志が直接的に客観化されたものが「身体」である。この「意志」と「身体」の関係を他のあらゆるものに適用する。例えば、食物の消化、血液の循環、分泌、成長、再生、磁力、石の落下・・・などである。つまり、生理現象や、あらゆる物理現象を「意志」の活動とした。人の生に加え世界の原理を「充足理由律」<sup>4</sup>の妥当しない「根本意志」とみなす。「充足理由律」は、一定の状況において行動する動機を説明することができるけれども、そもそも人がなぜ、なんのために行為するか、という問いに答えられていない。つまり、生と世界の原理であり、その外側から因果論的にも目的論的にも説明のつかない「根本意志」を「充足理由律」は説明できない。このような「意志」は根拠も目的もないために、「理性的ではない盲目的な迫力」であり、自らを休みなく展開せざるをえない「無意識的衝動」である。根本意志は究極の目的を欠いているために、例え努力しても、何らかの目的を達成することはできなく、最終的な満足を得ることはできない。

それ故に根本意志はただ抑圧によって阻まれるだけであって、絶えず努力しなければならない。というのは、意欲があるのは、その意欲を満たし得ない障害があるからであって、意欲はその障害を乗り越えようとするけれども、それを完全にのりこえられないからである。つまり、意欲のあるところに必ず障害がある以上、意欲は障害とともに存在する。ということは、根本意志は苦悩に満ちた意志だと言うことになる。人は努力しても阻まれるから、いつも悩まざるを得ない。要するに、生は悩みである。この苦悩からまぬがれる道は2つあるとした。それは、芸術的解脱と道徳的解脱である。

## (3)芸術的解脱

認識は、生きようとする意志に奉仕するが故に、生の個別的な効用や利害から逃れられない。それに対し、芸術は認識ではなく直感であるから、生の効用や利害に囚われてはいない。

何人かの特別な人にあっては、直感が下部構造としての意志から独立しており、意欲

---

<sup>2</sup> 主観的観念論。

<sup>3</sup> 感性と悟性によって認識できる現象以上の原理のこと。カントはそれを物自体とする。

<sup>4</sup> 人の行為の背景の理由や目的が「動機」とみなされ、その動機を説明する法則。

のあらゆる目的から自由に、純粹にそれ自身として存在することがある。その場合、世界はまったく澄んだ鏡の状態になる。芸術はこのような澄んだ鏡の状態から生まれるのである。

よって、音楽が、人の生の利害と効用から救済する至福の立場だと言うことになる。芸術は人生の苦悩を緩和するというのは、ショーペンハウアーのテーゼであり、われわれに瞬間的・個人的なものの奥に潜む永久的・普遍的なものを提示する。

とはいえ、それは芸術による安らぎは長くは続かない。それは、生きんとする意志は芸術によって安らいでいた生の悩みを認識せしめるからだ。つまり、芸術は一時しのぎであり、根本的解決にならない。

#### (4)道徳的解脱

永続的な苦の脱却は道徳において可能となる。道徳とは同情によって成り立つのであるが、同情とはわれわれが個性を捨て、他人も自己も同じ本質を有するものであることを把握する。そして、他人の苦をも自己の苦として同感することに他ならない。したがって単に自分の欲望を満足させようとする利己主義は消失するのである。

だが、この道徳による救済もまた究極的なものではない。なぜなら、この場合において、確かにわれわれは個人性を脱却しているが、それはなお、他人を自己と同じように愛し、それに対してできる限りのことをするということであって、やはりその根底においては生への意志を肯定しているからである。それは決して苦からの完全な解脱ではない。

#### (5)禁欲

この生に伴う苦から逃れるには、意志そのものを否定しなければならない。つきつめれば「死」は歓迎すべき救済である。とはいえ、われわれは常に死と闘っている。われわれの行動は死の先延ばしに過ぎない。このような境地に至ればわれわれはもはや何ものによってもその意欲を引き起こされることなく、禁欲の生活をなすに至る。この禁欲こそ生への意志の完全な否定であり、これによって真の解脱が可能である。苦の世界からのこの解脱によってわれわれは空虚な無へ移る。しかし、解脱した人にとっては実はこの世界こそが無に他ならないのである。

## 4. セーレン・オービエ・キルケゴール

(デンマーク : Søren Aabye Kierkegaard, 1813年—1855年 キリスト教徒)

### (1)実存

わたしは、今ここに生きている一人の人間である。今ここの特定の状況のなかに生きているわたしである。そのわたしは、わたしが何であるのかという「本質規定」とわたしがいかにあるかの「存在規定」を問うことができるため、区別可能である。「本質規定」がなされたとしても理念的規定や一般的規定にとどまり、わたしが個として生きている仕方は規定されえない。それ故、わたしという個の生き方を「実存」となづけて、「実存」の仕組を問うた。実存は関係であり、状況によって変わる。

### (2)自己

『人間とは精神であり、精神とは自己であり、自己とは自己自身に関係するところである。』

——キェルケゴール『死に至る病』

自己が自己であるためには自己をここに置いた者(=神)と関わらなければならない。実存と実存の関わり合いがあつてこそ人間は自己自身となることができる。しかし、人間は自由である。自己を失う自由もある。永遠者の意識を持っていながら現実にはそうになっていない自己にとっては、永遠者になることが課題となる。現にあるがままの自然的な自己は本来そうなるべき自己に実際になろうとする課題を負う者であるにすぎない。「自己生成」の無限の努力のうちにあり続けることが「実存する」ということの本来の意味である。

自己がこのような意味での実存となっていない状態、自己の本来の姿を見失った自己喪失の状態にあること、これが「絶望」なのである。

### (3)絶望

『絶望とは、自己自身に対する関係のうちに分裂がおこることである。・・・中略・・・  
しからは、絶望はどこからくるか。』

——キェルケゴール『死に至る病』

人間は将来の可能性にめがけて生きている。しかし現実はその可能性がまるごと実現

することはない。日常生活における挫折が絶望<sup>5</sup>につながるのである。このように現実性と可能性のあいだに引き裂かれながら生き続けるしかない。もし、人間のうちに永遠者がいなければ、絶望しなかった。

絶望は精神における病、自己における病であり、したがってそれには3つの場合がありうる。(①→③にいくにつれ、救済の道が開かれている。)

① 絶望して、自己をもっていることを自覚していない場合<sup>6</sup>

絶望の最低度の人。快・不快、幸運・不運、運命に左右される受動的な人。外的なものに左右され、自己主張をしない。この世に存在する「地上的なもの」だけを求める。

② 絶望して、自己自身であろうと欲しない場合。

「地上的なもの」を失った時に絶望を感じ、「永遠的なもの」に絶望する。①よりも高い意識にある。永遠者につながっていると思っていた自己自身、自己の力へ絶望して、自己自身であろうとしないこと。<sup>7</sup>

例えば、金銭を落としてしまった際に感じる絶望である。これは、金銭を落としてしまったことに絶望するのではなく、金銭を落としてしまった自己に、自己の能力のなさに絶望している。

この絶望は深く、閉鎖に向かってしまう。孤独に向かい、自己の内側へ閉じこもってしまう。そして、本来の自己自身であろうとしなく、自己逃避や現実逃避に向かう。しかし、自己からは抜けきることはできない。

③ 絶望して自己自身であろうとする場合。

*『彼は全存在に向かって反抗することによって、全存在を全存在の好意を、反駁しうる証拠を握っているつもりである。絶望者は自己自身その証拠であると考えているのである、彼はその証拠であることを欲する——それ故にかれは彼自身であろうと欲するのである、すなわち自己の苦悩をもって全存在を拒絶しうるように苦悩*

---

<sup>5</sup> 絶望とは不安が自己において最も明確な形で捉えられるようになることである。不安とは、自己の内に潜むはずの「永遠なるもの」から引き裂かれているのだということを感じたときに感ずる根源的な情動である。

<sup>6</sup> 非本来的な絶望である。

<sup>7</sup> 弱い絶望である。

をもったままの彼自身であろうとするのである。』

——キェルケゴール『死に至る病』

神が創造主であり、全存在に対する反抗は、神に反対するのと同じ。創世記にて天地創造の後に「すべては善かった」とあるから、神の創ったものは全て善く、それがここでの好意である。しかし、ただひとつの例外を除いてである。それは彼<sup>8</sup>である。自分が神の言葉に反対する唯一の証拠である。

この時の自己は最低の自己を欲している。われわれは具体的自己をそれがいかに醜悪であろうともそれを振り捨てることはしない。救済の道が開かれようともそれを拒み、ありのままの自己であろうとする。『苦悩をもったままの彼自身であろうとする』ということは、あえて苦悩を選んでいる。「あろうとする」とは、自覚的にはそれからいかに逃れたいと願っていても、実存の深いところで刻々とそれを選んでいるということ、それから逃れられないことを認めながらも生きていることだ。

例えば、優れているひとに対する何もない自分は彼を優れていると認めているが、彼になろうとはせず、自分のままでいようとする。

*『弱さに絶望している者が、永遠が彼にとって慰藉であることなどに耳を傾けようと欲しないように、強情における絶望者もまた永遠の慰藉などに耳を傾けようとは欲しないのであるが、その理由は異なっている——後者は実に全存在に対する抗議たらんと欲しているのであるから、慰藉などはかえって自己の没落となると考えるのである。』*

——キェルケゴール『死に至る病』

自己の存在を憎悪しつつも自己自身であろうとする。これは「強情」<sup>9</sup>のためである。万一救われるとしても、その吐き気がするほど嫌な自己をまるごと引きずって救われるしかない。それを「肉体の棘」と表現している。これは抜き差しならない、痛みを伴うような劣等感であり、抜くことを拒否する。「強情」が故に、苦しみながら生きていた方がましだとし、その方が自己自身である。すなわち、「実存」である。

---

<sup>8</sup> キェルケゴールのこと。

<sup>9</sup> 「反抗」と訳すこともある。

#### (4)絶望は死に至る病

自己とは「帝王か然らずんば無」である。自己は帝王にならなかったことに絶望しているのではなく、帝王にならなかった自己に絶望している。より高い目標を失う危険を前にした場合にだけ、私どもは、より低い目標を失う危険に耐える勇気を持つことができる。絶対に失ってはいけない人生の高い目標の喪失、これが精神としての自己、人格としての自己を失うということである。これこそが人格にとっての真の死を意味する。これが絶望である。

#### (5)実存段階

自己を失った状態が絶望であり、本来そうなるべき自己になることが実存である。つまり、「自分自身がどう生きるか」という部分が重要であり、このような考え方を主体的真理という。主体的真理が自分にとっての正しいあり方である。その実存を3つの段階で展開した。

##### ① 第一段階 美的実存

感覚的な快樂を求めること。しかし、美的実存はどれだけ求めても満足を得ることができないものであった。ただ倦怠感があるのみである。そのため、美的実存に飽きると同時に絶望の感覚になってしまい、挫折することになる。

##### ② 第二段階 倫理的実存

愛情や道徳などを始めとして、自分の全てを倫理的行為に捧げること。これは自分の欲望に反して行動することになる。しかし、倫理的実存に基づいて、相手の義務に対して全ての責任を負うことは実際のところ、困難であり、自己の限界に気づく。そのため、キルケゴールは人間が全ての責任を負うことができないという、人間の無限ではない部分に深い絶望を感じる。

##### ③ 第三段階 宗教的実存

信仰するという立場に立つこと。信仰は、理性という立場から考えれば、合理的ではなく、矛盾しているかもしれないが、それに対して実存的な決断をして認めることが大切である。そのことによって、初めて絶望が乗り越えられる。

宗教的な生き方が他と質的に異なるのは、自らの生に対する絶望の自覚であり、それを癒すのが人自身の力ではなく、信仰にあるということである。絶望とは自己が自分自身に絶望することであり、虚しいが、自分自身の生を否定しえない故に、自分自身の生

に絶望する。しかし、これは人が自らの力では生に対する絶望を克服しえない。よって、この死に至る病を癒すのが信仰に求められる。

自分の魂を見つめたとき、何か人格的なものの前に人は立っていることを知るのである。その人格的な者は自分より上位のもの。キルケゴールは「イエス・キリスト」であった。自己の否定によって、自己の罪を悔い改める。自己の内部の心の神的存在を受け入れる。両者の実存のギャップのために、罪悪感を覚える<sup>10</sup>。そこで人間とはあまりに異質な神の実存を受け入れる。自己が神の実存の前に「単独者」として立たされる。それを支えるのは理性を超えた不条理な「信仰」だけである。人間にとって、自己を持つことは最大のことであり、また、永遠が人間に対して要求する最大のものである。

深い絶望の淵に投げ込まれた人間は生きていることを肯定できる気持ちをもたらしてくれるものにすぎるしかなくなる。それが神である。このときに神への信仰が内側からわき起こってくる。これこそが真の信仰であり、形だけ教会に通っているような形だけの信仰を批判。権威すぎるカトリック教会も批判した。彼は何の権威にすぎることなく真のキリスト教徒になろうとした。

## (6)不誠実

各人は自己をごまかして絶望の最低段階に留まることもできる。だが、これは自己に不誠実な態度であり、とることはできない。われわれは誠実であろうとする限り、「強情」という絶望段階に至る。キリスト教徒であって、誠実であろうとしない者は、キルケゴールにとっては自己矛盾であり、異教徒と同様対象外である。

## 5. フリードリヒ・ヴィルヘルム・ニーチェ

(ドイツ: Friedrich Wilhelm Nietzsche, 1844年—1900年)

### (1)ニヒリズム

ニーチェは、キルケゴールとは反対で、神がいない状態での実存を探した。その中でニヒリズム<sup>11</sup>を提唱した。道徳や形而上の世界は幻想に過ぎず、このような「背後世界」に逃避するのではなく、この現にある唯一の世界を、最も恐るべき側面を含めてあるがままに肯定し、これを愛するべきことを主張する。

---

<sup>10</sup> ここでの信仰の内容をなすのは、永遠なものが時間の中に出現したという、すなわち神が人間になったというパラドクスである。

<sup>11</sup> 既存の宗教や価値や社会や権力などを全て否定すること。ニヒリズムは「虚無主義」であり、ニヒルは「無」のことである。

## (2)キリスト教

この考え方の背景にはキリスト教がある。自身の欲望を抑え、利他的な生き方が尊ばれてきた。清く正しいとする、キリスト教徒的な考えは、弱者の強者に対するルサンチマン<sup>12</sup>から生まれた。紀元前のユダヤ人はローマの支配下であり、権力者、富者であるローマ人に復讐する力がなかった彼らは観念の中で復讐をしようとした。

『あいつらは悪人であり、地獄へ落ちるのであると、力なく貧しいわたしたちは神から愛される善人であり、天国に行けるのだと。』

『貧しきものこそ幸いである。天国は彼らのためにある。金持ちが天国に行くのはラクダが針の穴を通るよりも難しい。』

——『新約聖書：マタイによる福音書』

自然的な快楽を否定し、道徳的に善いことだけを教義とする。現世と来世や原罪という観念にそれが表れている。これに対して「自らを呪われた無価値なもののみなし、現世の欲望を否定し、そして現世の生は仮りそめで真実の生は彼岸にあるとするキリスト教は『生を絶対的に否定しようとする意志』であり、『ニヒルへの意志』であり、もともとがニヒリズムなのだ」とする。多数の弱者には生きる意味を与え、心正しく生きれば神が救うとし、これが「自己保存」のための手段であった。

## (3)力への意志

様々な価値を創り出すものを生命体にそなわる根源的な衝動とし、「力への意志」とした。これは「自己保存」と「力の増長及び生長」とした。このような「力への意志」認識にも反映されている。「力への意志」はニヒリズムの克服の意味がある。

## (4)認識

『事実というものは存在しない。存在するのは解釈だけである。』

——ニーチェ『権力への意志』

認識とは単なる模写ではなく、自己保存のために行われる行為である。生にとって有用性という観点から世界を秩序づけることこそが認識の本質である。例えば、われわれが「食べられるもの」と「食べられないもの」を区別するのは、日常生活を送る上で必

---

<sup>12</sup> 嫉妬・羨望による憤り、恨み、憎悪、非難の感情。

要なことだからである。

## (5)超人

「力への意志」は諸価値を生み出す原理と考えるだけでなく、これらの一切の価値を測るための客観的な基準となる。様々な価値の役割が生命体の「保存及び生長」にあるとする。キリスト教は保存には役立つが、生長には役には立たない。ニヒリズムの立場からキリスト教と対立する考えとして、「神は死んだ」と宣告した。そこで生み出された思想が「超人」思想である。これは「力への意志」の本性を全的に体现するような存在である。つまり、ルサンチマンに陥ることなく、新たな生の可能性を創造しようとする力に溢れた存在である。この意味のない世界に積極的に意味を見出す存在である。

## (6)永遠回帰

*『一切は行き、一切は帰る。存在の車輪は永遠に回転する。一切は死し、一切は再び花開く。存在の年は永遠に経過する。』*

——ニーチェ『ツァラトゥストラはこう言った』

ニヒリズムの対抗策は「超人」思想だけではなく、「宇宙の万物は永遠に同じ経過を繰り返している」という「永遠回帰」という思想を持ち出している。そもそもルサンチマンとは、受け入れ難いのに変える力はなく、そこから復讐しようとする衝動から生まれた。これは「もし・・・、あのとき・・・」のように過去に対する恨みとして現れる。また、現状の苦しみを神に与えられた試練とし、「何のために・・・」のように将来の救済へと求めようとする。

しかし、このようなことには何の意味もないものとした。過去（もし・・・、あのとき・・・）は変えることはできなく、将来（何のために・・・）に対しての答えはない。つまり、過去の起きたことはただ繰り返されるばかりで、将来の発展や進歩も何の意味もないのである。ただこの事実を受け入れるしかないのである。

*『人生はひとつながりの輪である。もし一度でも心から生きてよかったと思うことがあったなら、君は人生の全体を肯定したことになる。そのとき君は《あらゆる苦悩とともに万物の苦悩よ戻ってこい、この生を私は欲する》とすることができる。』*

——ニーチェ『ツァラトゥストラはこう言った』

このような考え方から、「未来」や「過去」とらわれず、「現在」を充実させること

が大切だと考えた。その際に、自分をしっかりもつことである。認識が自分の視点であるように、何が大事かどうかも周りの意見ではなく、自分がどう思うかである。

## 6. カール・ヤスパーズ

(ドイツ: Karl Theodor Jaspers, 1883年—1969年)

### (1)目的

人間が本来の自己自身にたちに戻ることを助成すること。本来の自己自身とは、欲得と自己保存のために生きている今の意識を変革することで、表皮を剥いだように見えてくる自分、他の誰とも取り替えのきかない自分という存在である。

### (2)現状

現代社会は機械文明と大衆化社会で人は役割を演じているに過ぎず、人間は手段とされている時代である。人間は外に立って神の視点に立つことはできない。人間は状況の中に生きているにすぎない。状況は現実的でかつ個別的である。状況はいつでも人間の半身である。だから、人間は状況内存在である。

われわれの周りにはあらゆる状況が存在する。例えば、性別、労働、年齢、制度、、、などである。これら必然性の中で人間が得るものは、罪、苦しみ、争い、挫折、そして死である。これらに対抗する術はない。人間にできるのは、必ずすべてのことが挫折するという「自覚」をするということである。しかし、その状況の深淵に立ったとき、外的な生活条件という表面上の拠り所は崩壊する可能性があり、私は私自身へと根源的に投げ返される。その深淵とは限界状況<sup>13</sup>である。

### (3)限界状況

『私が常に状況の中にあるということ、私が闘争や苦悩やなしに生きることはできないということ、私が負い目を引き受けるのを避けられないということ、私が死なざるを得ないということ、このような状況を私は限界状況と名づける。・・・中略・・・われわれが諸々の限界状況に有意義に反応するのは、それらを克服するための企画や打算によってではなく、まったくべつの活動、すなわち、われわれのうちにある可能的実存の生成によってである。われわれは、目を見開いて諸々の限界状況のなかへ踏み

---

<sup>13</sup> 限界状況は、人間を孤独にさせることで、本当に深い他人との関わりが欲しくなるようにさせる。だから、孤独な人がお互いにお互いの根本について質問しあうことができる。このような状況をヤスパーズは「実存的な交わり」とする。

込むことによって、われわれ自身となるのである。』

——ヤスパース『哲学：実存開明』

限界状況とは、どれだけ科学技術が発達しても、どうしても変えることができない状況である。誰もが突き当たる壁のようなものであり、その典型的なものが「自己の死」である。それに突き当たることによって、各人がそれまで意識していた自己自身の存在に対する確実性の挫折を自覚させられるのである。

限界状況ぶち当たると人間を超えたあるもの<sup>14</sup>を感じるようになることができようになり、実存に目覚める。

#### (4)超越的存在

存在の源泉からの指示を聞くのである。存在の源泉とは、論理を超えたものこの世では矛盾や対立に見えるところが融和しているもの、完全な安静の場所、言葉による思考が及ばない存在の場所を指している。それは超越者である。誰もがその超越者に合うわけではない。苦しみを自分の状況として真に受け止めるという意識と理性の姿勢のみが超越者の声を聞くことができる。

#### (5)実存的交わり

超越者に出会うことで、人間が実存となる。人間は他との関わりを通してのみ自己自身を明らかにすることができるからだ。実存は必然を選択して本来の自己になる自由である。ここでの選択はそうせざるを得ないぎりぎりの選択である。つまり、人間が実存として生きようとするとき、その時の生き方は真剣なものとなり、あらゆる事象との出会いに「一期一会」という真剣さが生まれてくる。

このような中において、他人との実存的交わりを「愛の闘争」としている。これは、他人との服従や同化ではなく超越者に触れている他人をかけがえのないものとしてつくしんで生きるということである。

「限界状況」により自己存在の有限性は意識させられたが、それはまだ消極的な有限性の意識である。「無制約的なもの」という超越的存在に面することにより自らの有限的な存在が反省させられ、「絶対的意識」<sup>15</sup>が得られるのである。これは自己自身の存在確信にして、超越的な存在に面している意識である。

---

<sup>14</sup> 超越者ないし包括者のことを指す。

<sup>15</sup> 超越的存在に面して得られる、自己自身の存在確信のこと。

キルケゴールから得た「不安」とはヤスパーズによると「絶対的意識の動因」となる。なぜなら我々は自己存在の確実性をいかなるものからも得られず、このような心的状態が不安であり、他者や財産及び自己自身の肉体のあらゆるものをもってしてもこの不安が解消されないので、そのために人間は「超越的なもの」へと向かって自己存在の確信を得るとともにこの不安を克服する勇気を得るのである。

## (6)暗号

実存として人間が生きるなら世界は暗号に満ちたものになる。暗号とはわれわれが聞く超越者の言葉である。自然そのものや、歴史、芸術、哲学的思索の言葉などが超越者からの暗号である。つまり、それ自体は何かを語っている訳ではないが、そこから読み取ることができる。その暗号を自己との関係の中でどう解釈するかによって実存の在り方が決定されることになる。

## (7)実存

『現存在という現象のうちで存在するのではなく、存在することができ、また存在すべきであるような存在、それゆえ、永遠であるかどうかを時間的に決断する存在。実存としての私自身はそのような存在である。・・・中略・・・実存の可能性から私は生き、実存を実現するなかでのみ、私は私自身である。』

——ヤスパーズ『哲学：実存開明』

限界状況を経験することで実存することになる。そのことによって、現存在から実存へと進んでいく。これは、自分の可能性に向けて人間らしく生きることである。それが、本来の自己自身であり、他の誰とも取り替えのきかない自分という存在である。

## 7. マルティン・ハイデガー

(ドイツ：Martin Heidegger、1889年—1976年)

### (1) 実存論

人間はみなこの同じ世界のなかで生きているという意味で、誰もが切り離しえない関係で結ばれている。世界の「客観性」ということ、また客観的な学問が成立するというのもこの事実根拠を持っている。ところがもう一方では、誰もみな同じ世界に生きているのに、個々人の「生の世界」はみなばらばらで全く違ったものであるとも言える。誰にとっても自分の生は一度きりという「生の一回性」であり、また他の誰のそれとも

取り替えられない「交換不可能性」がある。このような個々人の生の単独性と固有性に関して、客観的学問ではうまく考えることができないのである。実存論の哲学はこの問題を対象とする。

## (2)基礎的分析

通常現存在は自分の存在については分からない。現存在は孤立した存在ではなく常にある状況と関わっている。ここでは、「世界-内-存在」とする。ここでの存在者は道具でしかない。道具とは各人の欲望・関心に応じてその用途性を露にする存在者を意味している。われわれ存在者としての人間は日常に埋もれて何かの目的を達成するための道具として自己了解しているだけである。そのような自己はかけがえのない存在ではなく誰でもいい「das Man (ただの人)」(=非本来的)。本来の自己了解はこの「das Man」から抜け出ること得られる(=本来的)。

## (3)了解

『了解は、現存在の存在を現存在のそのつどの世界性としての有意義性へと投企するが、それと同様に根源的に現存在の存在を現存在の目的へと投企する。・・・中略・・・現存在は、現存在として、そのつどすでにみずからを投企してしまっており、存在する限り、投企しつつ存在するのである。・・・中略・・・現存在は了解として自らの存在を諸々の可能性へ向けて投企する。・・・中略・・・了解という投企は、自らを完成するという固有の可能性をもっている。』

——ハイデガー『存在と時間』

「存在の意味」は、あらかじめもち、あらかじめみて、あらかじめ掴むことによって「決意された自己投企」を根拠として、新たに生まれた自分を了解するところにある(=実存)。「現存在」は他の存在とは異なり、「己の存在において、この存在そのものに関わりいくことが問題である」ような存在者であり、自らの可能性を了解しつつ存在していかざるを得ない存在者である。われわれは「世界-内-存在」として、この世の内に投げ出され「被投性」、何らかの「気分」の中で、己の可能性を「了解」しつつ「投企」する。「世界-内-存在」として了解し「投企」する。

## (4)気遣い

われわれは状況と関わっていく中で、己を取り巻く様々な道具に、意を配り(=配慮的気遣い)、他者たちを顧み(=顧慮的気遣い)、己を気遣い生きている。被投的投企に

おけるこのような気遣いこそが現存在を現存在たらしめている当のものである。しかし、気遣いつつある現存在は、ごく普通の日常的なあり方においては、道具や他者を気遣うまさにその故に、われわれは状況と関わっていく中で、己を取り巻く様々な道具に、意を配り(=配慮的気遣い)、他者たちを顧み(=顧慮的気遣い)、己を気遣い生きている。現存在は大抵このような「非本来性」の内にある。

#### (5)不安

この非本来性から本来性へと目覚めさせるきっかけとなるものとは何か。それは不安という根本気分である。不安は恐れと異なり、特定の対象をもたない。むしろわたしが世界の内に存在していることによって、まさに「世界-内-存在」であることそれ自体を気遣って不安になるのである。それは、他の誰でもないこのわたしが引き受けなければならない死という可能性を前にしての不安でもある。

#### (6)死

死は経験それ自体の終わりであるという意味で誰にも経験できない「経験不可能性」があり、誰もが人と交換できなくそれを抱えている「交換不可能性」がある。加えて、死は完全に避けることはできない「不可避性」や、可能性としては次の瞬間にもやってくるかもしれないという「切迫性」をもっている。そういう恐るべき可能性であるが故に隠蔽するのである。この隠蔽は人間の潜在的な不安の気分として根本気分を作り上げている。

死は実は人間の日常の欲望や関心の動機を無意識裡に突き動かしている。なぜ人間は常に自分の自我を拡大しようとして、快樂の追求のみならず、果てしない権力欲や支配欲に駆られるのだろうか。その理由は、根本的には自分の生の一回生や死の不安を打ち消したいという暗々裡の衝動に動かされているからである。「ひと(世間人)」として好奇心に気を取られたりして、あいまいな日常を送っているのもそのためである。人間は、死に関心を抱くと同時に、死を忘れようとして、その時だけ気を紛らわそうとするのも同じである。

#### (7)先駆的決意性

人間の中に横たわる根本的な不安は現存在の終わりとしての死を思うことで生じる。ここに「先駆的決意性<sup>16</sup>」が見出だせる。これは、有限性の自覚につながる。このこと

---

<sup>16</sup> 死を先回りして了解し、受け入れること。

によって、「根源的時間<sup>17</sup>」を手に入れるのである。

われわれはこうした不安のうちで、世人としての自己喪失状態から引き離され「単独化」し、また己の死という可能性に向けて「先駆」することによって、あるべき本来的自己として実存する可能性に目覚める。現存在の存在をなす「気遣い」の本来の様態<sup>18</sup>である「先駆的決意性」において現存在は本来的自己となるのである。つまり、「先駆的決意性」こそが現存在の「本来の実存」としてのあり方に他ならない。

人間を「死への存在」とし、人間は死を覚悟して、死を自分のこととして考えることで、日常を超えて、超越した実存の自由を見ることが出来ると考えた。

#### (8)時間性

*『到来的にみずからに立ち帰りつつ、決意性は現前化しながら状況のなかへ入り込む。既在は到来から発現するが、それは、既在した〈既在しつつある〉到来が現在をみずから解放するというようにしてである。このように、既在しつつ—現前化する到来としての統一的现象を、われわれは時間性と名づける。・・・中略・・・時間性が本来的な関心の意味としてあらわになるのである。』*

——ハイデガー『存在と時間』

本来的な気遣いを可能ならしめるもの、すなわち、「現存在の存在の意味」はいかなるものとして、問い確かめられるだろうか。それは「時間性」である。

現存在の存在である気遣いには、『世界内部的存在者のもとでの存在として、己に先んじて世界の内では既に存在している。』という構造が含まれていた。本来的な気遣いである先駆的決意性は、『既にある己の責めある存在を引き受けつつ、その時々状況における世界内部的存在者のもとで、己のもっとも固有な可能性に関わり決意する。』という在り方であるため、この在り方が可能であるためには、現存在は、『己に先んじて己の可能性をめがけて己自身とへと到来しつつ、既にあった己に立ち戻りながら、現前する存在者をであわせている。』のでなければならない。まさにこの『既在しつつ—現前化する到来』という統一的现象をなすこの「時間性」こそが本来的な気遣いを可能ならしめるもの、すなわち現存在の意味である。

---

<sup>17</sup> この反対が「通俗的時間」である。

<sup>18</sup> 本来的な気遣いのこと。

## 8. アルベール・カミュ

(フランス：Albert Camus、1913年—1960年)

### (1)不条理

『多くの理由から人は、生活そのものが要求する、あらゆる身振りをし続けているが、その理由の筆頭にあげられるのは習慣である。意図して死ぬということは次のことを前提としている。すなわち、その人が、この習慣の滑稽なほどに取るにたりぬ性質や、生きることに深い理由などないこと、日常的転変の馬鹿げた性質、苦痛、こうした一切は無駄であることを、本能からであるにせよ、認めてしまっているということである。』

——カミュ『シーシュポスの神話』

日常生活で様々な不条理な側面がむき出しになっている。わたしたちの精神性を制約する様々な慣行や、潜在的な圧力は複雑怪奇なかたちで錯綜している。例えば、物質崇拜主義、過度のコマーシャリズムはわたしたちの欲望を支配し、生き様を固定化させ、科学技術の生活への圧倒的な浸透という畏には善良なる勤労者や学生の精神性を画一化し、麻痺させる可能性が常に潜在している。

投機の加熱と崩壊の繰り返し、金融資本主義の肥大化はカミュの時代から用意されていたものであった。共同体の調和は軋み、崩れ、人間の自由な精神は瀕死の状態であえいでいる。あるがままの日常に埋没している時はなし崩し的に生の意味を喪失していることになる。精神の死である。とはいえ、世界の不条理と対峙することは苦痛を伴う。

人間の英雄であるシーシュポスは無意味な神の罰にたじろぐことなく、毎日毎日、転げ落ちる大岩を頂上に運ぶ。山頂に運び終えたその瞬間に岩は転がり落ちてしまう。同じ動作を何度繰り返しても、同じ結果にしかならない。人はいずれ死んでしまうにも拘わらず、それでも生き続ける人間の姿を描いている。

抽象的な議論でなく、報われない労働に追いまくられ疲れ切った多くの人、理不尽な病気に長く苦しむ人など、不条理はこの世に満ちている。この世界に本質的な意味のないことは通念となっている。人間は無意味な世界に無意味に投げ出されている。しかも有限の命と共にである。しかし、それでも無意味な世界を無意味な行動で雄々しく人間は生きるべきである。それが本当の人間の自由であるとの思想は今も変わらない。

意味を見いだすのはおのれしかいない。おのれがおのれだけの意味を作り出す。人が、神がどう思おうと知ったことではない。シーシュポスは何のために岩を押し上げるかは考えず、押し上げること自体に意味を見いだした。人間は正しいと思ったことを行う生

き方しかできない。そのような生き方を肯定している。

## (2) ムルソーの反抗

『人は死ぬ者である以上は、いつ死ぬかは問題ではないことは明々白々なことだ』

——『異邦人』カミュ

制度慣行に生かされているという不条理に加担しないムルソー像。殺人罪で裁判を起こされたムルソーは、正当防衛であることを主張せず、虚偽の事実に対しても一切抗議しない。これがムルソーの反抗である。世間のシナリオ通りに生きることを拒んでいる。自分の精神性を失わぬよう振る舞っている。ムルソーの信条からすれば、死刑の執行までに自らの精神性を十全に生きることが重要である。慣習に埋没することで不条理から目をそらす日常的な生き方ではなく、真のムルソーを生きる。このことが価値あることである。

確実な何かを突き止めることが出来ない以上、世界は全て理解不可能なものとなる。明晰なものを求める人間が、世界の解き難い壁にぶち当たった時に生じる観念が「不条理」である。結局のところ、我々は日常を潤滑に送るために、理屈を付けて納得しているに過ぎない。人間が人間を殺すのに理由などあつてはならない。もし、正当な理由があるとすれば、恐ろしいことである。だが、戦争を正当化すると同様に、人々は殺人にも理由を強要する。理由などないことを自覚するムルソーはそれを拒むが、致し方がなく「太陽のせい」と答える。ムルソーは人間的な感情を持たないわけではなく、相反する感情の流れを自覚し、感情を誤摩化したりしないだけである。不条理を意識し、独断と偏見に満ちた人々に反抗したムルソーは葬られた。不条理に立ち向うことが重要なのである。

## 9. ジャン=ポール・シャルル・エマール・サルトル

(フランス：Jean-Paul Charles Aymard Sartre、1905年—1980年)

### (1) 人間の特異性

事物存在である「即自存在<sup>19</sup>」と意識として定義される人間存在を指す「対自存在<sup>20</sup>」

---

<sup>19</sup> 「あるがままに」あり続ける存在であり、「それであるものであり、それでないものではない」存在である。

<sup>20</sup> 新しい自分になっていく存在であり、「それであるものではなく、それでないものである」存在である。

と区別する。人間は変化し続けるため即自的存在である。それ以外の変化しないものは即自的存在である。

人間は様々な可能性が生じうるから不安を覚えるのである。例えば、崖の上に石があったとして、この石は様々な条件が揃えば物理法則に従って下に落ちていく。これは人間も同じである。しかし、人間は崖から落ちないように「企てる」ことができる存在である。石は決定論的にすでにどうなるか決まっているが、人間は自由であるため、注意して歩くことも、自ら落ちることもできる。そのため、自由である人間は不安<sup>21</sup>になるのである。

## (2)自己欺瞞

人間は自由であるがゆえに、「私は私でない」という在り方をしている。日常生活において、それぞれに与えられた役割を演じている。石は「石らしく」する必要はないが、人間は日常的道德<sup>22</sup>がわたしたちの行動を規定していると思いつくことで、自己欺瞞の中で生きている。なぜ、欺瞞であるといえるのか。それは、その規則に従うことを自分で決めたから、規則が意味を持つ。しかし、規則を成り立たせているのが自分である、と認めるのは不安を引き起こすので、規則がわたしたちの行動を規定していると思いつくからである。その思いつきによって、安心感を得るのである。

## (3)実存は本質に先立つ

『職人はペーパーナイフの概念により、またこの概念の一部をなす既存の製造技術——けっきょくは一定の製造法——にたよったわけである。したがってペーパーナイフはある仕方で造られる物体であると同時に、一方では一定の用途をもっている。・・・中略・・・ゆえに、ペーパーナイフにかんしては、本質——すなわちペーパーナイフを製造し、ペーパーナイフを定義しうるための製法や性質の全体——は、実存に先立つといえる。・・・中略・・・われわれが創造者としての神を考えると、神はたいていの場合、一人のすぐれた職人と同一視せられるのが普通である。・・・中略・・・実存が本質に先立つとはこの場合何を意味するのか。それは、人間はまず先に実存し、世界内で出会われ、世界内に不意に姿をあらわし、そのあとで定義されるものだということの意味するのである。・・・中略・・・人間はあとになってはじめて人間になるのであり、人間はみずからがつくったところのものになるのである。このように、人間の本

---

<sup>21</sup> 恐怖ではなく、不安である。

<sup>22</sup> 「立ち入り禁止」や「納税の義務」などの日常生活に関わる様々な規則のこと。

性は存在しない。その本性を考える神がないからである。』

——サルトル『実存主義とは何か』

人間がつくった物は生み出された時点で、そのものの本質が決められている。例えば、ペーパーナイフはつくる際に、使用用途が決められているため、実存よりも本質が先に決められている。しかし、無神論的実存主義のサルトルの立場からすると人間は誰かにつくられていなく、人間の本来あるべき姿は元々決まっていない。つまり人間は本質よりも先に実存している。

対自的存在である人間は自己の本質を自らが決めるのである。実際に、人間は投企することを運命づけられている存在である。

#### (4)自由の刑

『私は永久に、私の本質のかなたに、わたしの行為の諸々の動機、や動因のかなたに存在するべく運命づけられている。言い換えれば、わたしは自由の刑を宣告されている。』

——サルトル『存在と無』

人間はまず先に実存し、世界内で出会われ、世界内に不意に姿をあらわし、その後で定義されるものだということを意味する。人間は自由な存在であるということのみが決められていて絶えず選択をしている。仮に選択をしなかったとしても、選択をしないという選択をしたことになる。すなわち、人間はこの自由から逃れる自由はないのである。このことから、人間は自由の刑に処されているとする。

#### (5)アンガージュマン

『人間は自由の刑を宣告されているがゆえに、全世界の重みをその双肩に担っている。人間は世界についても自己自身についても、その存在に関する限りその責任者である。・・・中略・・・対自は、みずからのおかれているこの状況を、その逆行率がいかに堪え難くても、それを含めて全面的に引き受けなければならないのである。』

——サルトル『存在と無』

自由だということは、自分のことは自分の責任で決め、他人や人類に責任を負うものである。このような考え方から、アンガージュマンを提唱する。これは、自己を自分で規定する、「自己拘束」を意味する。自分の世界だけで終わるのではなく、社会に参加

していこうとすること。

## (6)実践

投企という考え方は客観的事態である社会の問題を乗り越えるべく、個人的なものから、集団的なものへと展開していく（＝「全体化」という概念）。自分だけでは対処しきれない客観的事態を仕方がないものとして、受け止める消極的態度ではなく、積極的な社会参加によって、客観的事態をも変えることができるという弁証法的な主体のあり方をする。つまり、自分が常にアンチテーゼとなること。サルトルの実存主義は自己の行動を通じて社会変革を実現する理論として定式化する。

## 10. 終わりに

哲学は「philosophia」、「フィロソフィア」という語は、愛智という意味である。[philos（愛）+sophia（知恵、知、智）]が結び合わさったものである。元来「philosophia」には「知を愛する」「智を愛する」という意味が込められている。

今の時期に哲学をやるというのは、大学生活をいかに送るかを考えるための材料となったのではないと思われる。故に、自分の進むべき道を探っている人や、純粋に知識を欲している人の一助となれば幸いである。

今回のテーマについて触れると、生の哲学、実存主義などを扱ったが、キーワードは、「かけがえのない自己をもつ」ということであった。私個人の意見であるが、周りの者と同じことをするのは、一切価値のないことである。他者と差別化を図ることで、自身の存在意義が生まれ、行動に価値が生じるのである。

最後に、まとめとして皆さんにはぜひ他の人が挑戦したことの無いこと、やったことの無いことをやってほしいと思う。何か新しいことをやるのは自己自身のため、自己の更なる成長のために必要なことであるので、がんばってほしい。

期待する！

## 参考文献

- 新井 昭広(著) (1979年) 『思想史の巨人たち』 北樹出版
- 岩崎 武雄(著) (1975) 『西洋哲学史』 有斐閣
- 工藤 綏夫(著) (2000) 『キルケゴール』 清水書院
- 遠山 義孝(著) (1986) 『ショーペンハウアー』 清水書院
- 井上 正(著) (2000) 『アルベール=カミュ』 清水書院
- 樋口 克己(著) (2002) 『ニーチェ』 ナツメ社
- 永野 潤(著) (2003) 『サルトル』 ナツメ社
- キルケゴール(著) 斎藤 信治(訳) (1957) 『死に至る病』 岩波文庫
- ショーペンハウアー(著) 西尾 幹二(訳) (2004) 『意志と表象としての世界 〈1〉 〈2〉 〈3〉』 中公クラシックス
- ニーチェ(著) 原 佑(訳) (1993) 『権力への意志 上・下』 ちくま学芸文庫
- ニーチェ(著) 氷上 英廣(訳) (1967) 『ツァラトストラはこう言った 上・下』 岩波文庫
- ヤスパース(著) 小倉 志祥/林田 新二/渡辺 二郎(訳) (2011) 『哲学』 中公クラシックス
- ハイデガー(著) 桑木 務(訳) (1960) 『存在と時間 上・中・下』 岩波文庫
- カミュ(著) 清水 徹(訳) (1982) 『シーシュポスの神話』 新潮文庫
- カミュ(著) 窪田 啓作(訳) (1963) 『異邦人』 新潮文庫
- サルトル(著) 伊吹 武彦(訳) (1996) 『実存主義とは何か』 人文書院
- ナイジェル ウォーバートン(著) 船木 亨(訳) (2005) 『入門 哲学の名著』 ナカニシヤ出版
- 竹田 青嗣/西 研(編) (1998) 『はじめての哲学史』 有斐閣アルマ
- Peter Kunzmann/Franz-Peter Burkard/Franz Wiedmann(著) Axel Weiß (イラスト) 忽那 敬三(訳) (2010) 『哲学事典』 共立出版
- 麻生 享志/伊古田 理/桑田 礼彰/河谷 淳/飯田 亘之/黒崎 剛/久保 陽一(著) (2002) 『原典による哲学の歴史』 公論社
- 山本 巍/宮本 久雄/門脇 俊介/高橋 哲哉/今井 知正/藤本 隆志/野矢 茂樹(著) (1993) 『哲学原典資料集』 東京大学出版会
- 岡崎 文明/谷 徹/杉田 正樹/榊原 哲也/中釜 浩一/日下部 吉信/竹田 純郎/服部 健二(著) (2002) 『西洋哲学史』 昭和堂